

デジタル後進国

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

先ごろ、勤務先といっても週2日の勤務であるが、その職場でサンプル調査のためという触れ込みに乗って、PCR (Polymerase Chain Reaction, ポリメラーゼ連鎖反応) 検査を受けた。ウイルスに特徴的な遺伝子配列を検出する手法の一つだそうである。

検査はスマートフォンで所定のQRコードを読み込み、アプリケーションをダウンロードし、インストールするところから始まった。名前、電話番号、などアンケートと称する質問に答えて、受付テーブルに進むと、受付嬢が矢継ぎ早にいろいろな説明、指示をするので四苦八苦しなから管理番号のダウンロードをし、再度名前や電話番号など入力して、次に唾液採取方法の講義を受けた。長い説明も終わり、丁寧に隔離されたブースで受付嬢の指示通りアプリケーションを立ち上げ、先に聞いたのとまったく同じ内容のページを閲覧しながら所定の量の唾液を容器に入れ、キャップをして二重に厳封して組み立てた提出用の紙箱に収納。管理番号シールを張り付け、漸く提出。いらなくなった部品は材質ごとに分別回収。QRコードの読み込みから40分程度経過していた。

ダウンロードしたアプリケーションは今も筆者のスマートフォンに鎮座しているが、毎日スマートフォンで生活している若い人ならともかく、主に電話機として利用している筆者にとってはかなり扱いづらいものであった。個人を特定し、個人の情報を保護することが目的なら、面倒なソフトウェアを使わずとも国民等しく持っている健康保険証の番号を使えばいいのに。どうしてややこしいソフトをインストールまでさせるのか、筆者には理解しがたい。3日後にくだんのアプリケーションを起動すると陰性(ウイルス検出限度以下)とのお答えを頂いたのはいいが、どう考えても煩わしい手続きとしか言いようがない。

自宅に帰ると91歳になる義母にワクチン接種の案内とコード番号など記載の紙が届いていた。電話かネットで応募とのこと。電話はまるで無理なので、スマートフォンに詳しい娘の手を借りて、どうにか1か月以上あとに1回目のワクチン接種ができるようにはなった。自治体によっては1回目と2回目をまとめて予約できるそうだが、神戸市では1回目が終了しないと2回目の予約ができないという。ネット予約するにしても、接種可能な会場や医院と日程が一覧表ですらりと出るならいいのだが、いちいち各会場のページに入って空いているかどうか確認しなければならない仕組みになっている。上記と同様、保険証の番号さえ入れば個人を特定など簡単であるはずが、長ったらしい予約番号とパスワードが送られてきた。どうも個人情報の保護の意味を取り違えているとしか思えない。

国を挙げてデジタル後進国と言っているが、これは間違った理解である。このような業務にまるで不慣れな自治体の職員を活用せずとも、たとえばコンピュータソフトや受付業務に長けた専門家集団である航空会社のフライト予約システムや、もっと身近にある交通系のICOCAやPiTaPaのシステムと健康保険証を援用すれば非常にすっきりと速やかに予約も可能なはずである。我が国の現状は、個別の要素的ソフトウェアの制作はできるが、基本になるシステムの設計がで

きていないといわざるを得ない。電話予約も同じこと。マスクミを通じて高齢者は重症化しやすいと十分に不安感を抱かせられた1690万人（後期高齢者人口）の多くが電話予約に殺到するのは当然で、たちまちパンクするのは必定。こんな簡単な算数ができないなんて、情けなくなる。我が国はデジタル後進国ではなく、システム設計後進国なのである。その基本問題に政府、自治体、国会も含めて気が付いていないように思う。マイナンバーカードに保険証の機能が付けられるようになったそうだが、逆で、保険証にICチップを埋め込めば済む話ではないかと思う。そうすれば、ワクチン接種の予約もICOCAと同じようにコンビニ、駅、あらゆるところで可能になるように思うのだが。

